

## 高校生用家庭ストレス尺度の作成

# Development of a Family Stressor Scale for High School Students

吉 原 寛\*

Hiroshi YOSHIHARA\*

### 要 旨

本研究の目的は、高校生の家庭ストレス尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。高校1～3年生655名を対象として質問紙調査を行った。因子分析（最尤法、プロマックス回転）の結果、「家族からの干渉」「家族間の争い」「家ででの時間の使い方」「きょうだいとの関係」「学業に関する叱責」の5因子38項目（説明率55.01%）が抽出された。信頼性については、 $\alpha$ 係数を算出し、 $\alpha = .80 \sim .93$ の範囲にあり十分な信頼性が得られた。また、妥当性については、ストレス反応尺度と相関分析を行い（ $r = .16 \sim .44$ ）、一定の基準関連妥当性を備えていると判断された。さらに、簡便な測定尺度を作成するために、探索的因子分析結果をもとに、15項目の短縮版を作成した。その結果、信頼性、妥当性のある尺度が作成された。

キーワード：家庭ストレス、信頼性、妥当性、高校生

### 問題

近年、学校におけるいじめや不登校など学校不適応の問題が大きな課題となっている。これらの問題を規定する重要な要因として心理的ストレスが影響していること明らかとなっている。特に学校におけるストレスは学校ストレスと呼ばれ、学校ストレスに関する研究は、Lazarus & Folkman (1984) の心理ストレスモデルをもとに研究されてきた。学校ストレスやストレス反応などの尺度の開発とともに、コーピング、ソーシャルサポート、対人関係などの学校ストレスに影響を与える要因を含めた諸変数の関連性について研究がされている（例えば、吉原・藤生, 2005）。

特に学校ストレス尺度については、三浦・川岡 (2008) において高校生用の尺度が作成されている。その他にも、小学生・中学生を対象とした尺度も多く作成されている（例えば、嶋田, 1998a）。これらの学校ストレス尺度の多くは、三浦・川岡 (2008) のように学校の日常場面を分類した尺度となっている。それに対して吉原・藤生 (2001) は、従来の学校場面を分類した学校ストレスからより認知面に焦点を当てた主観的 school stressor 尺度を作成している。認知面に焦点を当てたことでより認知的な介入が可能

になると考えられている。

学校ストレスに関する研究は様々な視点から数多く行われているが、児童・生徒の家庭での日常的なストレスを対象とした研究はあまり見られない。田中・谷本 (2002) は、その理由として、①子供たちの生活の中心は学校であること、②子供たちが不適応行動を引き起こすきっかけとなるのは学校場面が多いこと、などが考えられると述べている。しかし、児童・生徒が日常生活において感じるストレスは学校ストレスだけではない。家庭における様々な出来事や家族からの影響も学校ストレスと同様に大きな影響を及ぼしていると考えられる。大きなライフイベントを経験している子供は比較的少数であるが、そのような経験を持たない児童・生徒においても日常の家庭生活で慢性的にさらされている不快な出来事によってストレスが高まっている可能性が考えられる。家庭におけるストレスを研究することも児童・生徒の心理的ストレスを理解するうえで重要であると考えられる。

ここで、今までわが国で行われている家庭ストレスの研究について概観する。

家庭ストレスの尺度の開発に関する研究については、石原・三宅 (1993) において児童における家庭

\*弘前大学大学院教育学研究科  
Graduate School of Education, Hirosaki University

ストレスの尺度化を行い、「塾・お稽古事に関する因子」「家庭学習に関する因子」「塾・お稽古事による犠牲に関する因子」「親との関係に関する因子」「友達との関係に関する因子」「兄弟との関係に関する因子」「嫌悪感に関する因子」の7因子を抽出している。また、藤井（1996）は児童を対象に家庭ストレス尺度を開発し、「家族からの学業に対する期待」「親からの強制」「孤独」「家族不和」の4因子を抽出している。中学生を対象とした尺度の開発としては、岡安（1999）は、家庭関連ストレスを作成し、「家の人との関係」「きょうだい関係」「塾」「叱責」の4因子を抽出している。しかしながら、これらの尺度は信頼性・妥当性の議論は十分になされておらず尺度としては十分な尺度とは言い難い。また、対象者が小学生・中学生に限定されており高校生を対象とした尺度は開発されていない。

家庭ストレスと他の要因との関連に関する研究については、岡安（1999）はストレス反応との相関を検討しており、家庭ストレス尺度の各下位尺度とストレス反応の各下位尺度は有意な正の相関があることを明らかにしている。池上・井上（2001）は、中学生のストレスと攻撃性との関連について調査し、中学生の攻撃性を高めているのは、学校よりも家庭で慢性的に受けるストレスであることを明らかにしている。藤井（1996）は、小学生の学校ストレスと家庭ストレスのストレス反応への影響を検討し、学校ストレスの持つ影響力の方が家庭ストレスの影響力よりも大きいことを明らかにしている。池上・井上（2001）と藤井（1996）は異なる結果となっており、学校ストレスと家庭ストレスではどちらが影響が大きいのか十分な検討が必要である。また、岡安（1999）以外は、家庭ストレスをひとまとめにして捉えており、下位尺度による検討は加えていない。家庭ストレスにも様々な要因があり、その要因と他の要因の関連は十分に検討されていない。十分な検討を行うためには、信頼性・妥当性の高い尺度の開発が必要である。

ところでこれらの研究は小・中学生を対象とした研究のみで高校生を対象とした研究は見られない。例えば、近年子どもの貧困や虐待が問題となっており、対象は小学生・中学生だけでなく高校生も含まれている。高校生においてもこれらの問題から生じる家庭におけるストレスは重要な問題となっていることが想定される。高校生が日常の家庭生活において、どのような出来事に対してどの程度ストレスを感じている

のか、またどのようなストレスがどのようなストレス反応を引き起こすのか明らかにすることは、学校ストレスへの対応とともに重要な基本情報の一つであると考えられる。また、生徒が家庭で経験しているストレスを測定することによって、直接的な介入は学校ストレスに比べ困難な部分もあるが、生徒の家庭での悩みを理解し、本人や保護者への適切な指導・助言につながることを期待される。また、嶋田（1998b）は、家庭ストレスを少なくすることは、学校ストレスに対する嫌悪性を低くさせ、ストレスに対するコントロール感を高めることを指摘しており、高校生の家庭ストレスを把握することは学校ストレスの軽減にもつながることが考えられる。

高校生の家庭ストレス尺度の作成を始め、ストレス反応への影響やコーピングなどの諸変数との関連を調べるためにも、本研究では、信頼性・妥当性の高い高校生の家庭ストレス尺度を作成することを目的とする。さらに、学校ストレスでは、学年差・性差が報告されていることから（例えば、坂・真中，2002）、家庭ストレスにおける学年差・性差についても検討する。同時に藤井（1996）が比較しているように、学校ストレスと家庭ストレスの大きさの違いについても比較する。また様々な場面で容易に活用しやすいように、できるだけ簡便な尺度作成を合わせて行うことを目的とする。

## 方法

### 1. 調査協力者

調査協力者は、公立全日制高等学校専門学科1～3年生655名であった（1年男子178名，1年女子59名，2年男子175名，2年女子57名，3年男子149名，3年女子37名）。卒業生の半数が大学・専門学校に進学し、残りの半数が就職する、学力的には中間層が多く在籍する、落ち着いた環境の工業系の専門学科を有する高等学校であった。

### 2. 手続き

（1）質問紙 1）家庭ストレス暫定尺度：生徒の立場から捉えた家庭におけるストレス尺度を作成するため、高校1，2年生76名（男子25名，女子51名）に自由記述式のアンケートを実施した。その結果、236項目が収集された。収集された項目と岡安（1999）の尺度項目をもとに質問項目を作成し、大学院生5名でKJ法による分類を行った結果15カテゴリーに分類された。その後カテゴリーをもとに45項目の家庭におけるストレスを測る暫定尺度が作成さ

れた。経験頻度と嫌悪度についてそれぞれ4件法(0～3)で回答を求めた。

**2) 主観的学校ストレス尺度:**吉原・藤生(2001)で作成された。下位尺度は「自己能力の低さ」(12項目),「人から受ける不利益」(10項目),「有意義な時間の欲求」(10項目),「人からの評価」(6項目),「人とのつきあい方」(7項目),「悪い結果の予想」(5項目)。経験頻度と嫌悪度についてそれぞれ4件法(0～3)で回答させた。信頼性・妥当性は確認されている。

**3) ストレス反応尺度:**吉原・藤生(2005)で作成された。下位尺度は「抑うつ・不安感情」(4項目),「不機嫌・怒り感情」(4項目),「身体的反応」(4項目),「無気力的認知・思考」(4項目)。4件法(0～3)で回答させた。信頼性・妥当性は確認されている。

(2) 実施時期 2010年7月～9月

(3) 調査手続き LHRの時間に、家庭ストレス暫定尺度、主観的学校ストレス尺度およびストレス反応尺度について調査を行った。ストレス尺度については経験頻度と嫌悪度について回答させた。また、回答はそれぞれ4件法で個人のペースで行われ、20～30分程度の時間を要した。

(4) 研究倫理 質問紙調査への参加は、協力者の自由意志であること、調査への参加によって個人が不利益を被らないことを示した上で、協力校の校長の許可を得て質問紙調査は実施された。また回答後の調査用紙は、鍵の掛かるロッカーに厳重に保管し、データの電子化にあたり個人が特定できる情報は含まれなかった。さらに、研究終了後は、調査用紙は粉砕・破棄し、電子化データは復元できない方法で消去する予定である。

## 結果

### 1. 家庭ストレスにおける因子構造の検討

分析にはSPSSver12.0を使用した。岡安ら(1992)に倣い、経験頻度と嫌悪度の得点を掛け合わせた得点を各項目の得点とした。最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析の結果、5因子38項目(説明率55.01%)が高校生の家庭ストレス尺度として抽出された(Table1)。第I因子は「家での自由時間を家の人に邪魔された」「疲れているとき家の人に話しかけられた」など家族から干渉を受けることに対するストレスであり、「家族からの干渉」(16項目)因子とした。第II因子は「家の人同士で言い争いがあつ

た」「家の人同士で関係がうまくいっていない」など家族間の争い事に対するストレスであり、「家族間の争い」(7項目)因子とした。第III因子は「時間が足りなくてやりたい事が全部できなかった」「テストが近いのに勉強していない」など家での時間の使い方に関するストレスであり、「家での時間の使い方」(7項目)因子とした。第IV因子は「きょうだいにばかにされた」「きょうだいにちょっかいをだされた」などきょうだいとの関係に関するストレスであり、「きょうだいとの関係」(5項目)因子とした。第V因子は「家の人にテストの結果でしかられた」「成績が悪くて家の人にしかられた」など学業に関する叱責に関するストレスであり、「学業に関する叱責」(3項目)因子とした。

### 2. 家庭ストレスの信頼性と妥当性の検討

まず尺度の信頼性を調べるために、抽出された5因子についてそれぞれCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、家族からの干渉( $\alpha = .93$ ), 家族間の争い( $\alpha = .86$ ), 家での時間の使い方( $\alpha = .81$ ), きょうだいとの関係( $\alpha = .80$ ), 学業に関する叱責( $\alpha = .80$ )という値が得られ、十分な数値であり高い信頼性が示された。

次に本尺度の妥当性について検討した。心理ストレス理論やストレスに関する先行研究の結果から、ストレスの認知が高いほど種々のストレス反応の表出が高いといえる(例えば, Lazarus & Folkman, 1984; 吉原・藤生, 2005)。そこで家庭ストレスの各因子について、各項目の合計点を項目数で割った値を下位尺度得点とし、その得点とストレス反応の関連性を調べることによって、本尺度の基準関連妥当性を検討した。具体的には、本尺度の各下位尺度と吉原・藤生(2005)で作成された高校生のストレス反応尺度の各下位尺度との間のPearsonの相関係数を算出した(Table2)。その結果すべての組み合わせで有意な正の相関がみられた( $r = .16 \sim .44$ )。したがって、本研究で作成された高校生の家庭ストレス尺度は一定の基準関連妥当性を備えていると判断できる。

### 3. 家庭ストレスの学年差・性差

家庭ストレスにおける学年差・性差について検討した。家庭ストレス尺度の下位尺度得点の平均値について、学年及び性を各要因とした2要因の分散分析を行った(Table3)。その結果、学年の主効果が有意であったのは、「家族からの干渉」( $F(2,623) = 3.88, p < .05, \eta^2 = .01$ ), 「家での時間の使い方」( $F(2,637) = 4.64, p < .01, \eta^2 = .02$ ), 「学業に関する叱責」( $F(2,644)$

Table 1 家庭ストレス尺度因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

項 目	因子負荷量				
	I	II	III	IV	V
<b>I. 家族からの干渉 (<math>\alpha = .93</math>)</b>					
15. 家で自由時間を家の人に邪魔された。	.91	-.18	.11	.04	-.12
39. 疲れているとき家の人に話しかけられた。	.85	-.12	.06	-.01	-.13
10. 一人になりたいときに家の人に話しかけられた。	.75	-.07	.08	-.05	-.08
21. 家の人に自分のしたいことをさせてもらえなかった。	.68	.04	.10	.02	-.07
16. 家の人に「ああしろ、こうしろ」といちいち命令された。	.67	.03	-.10	.00	.18
8. 家の人がかうさかった。	.65	.05	-.04	-.03	.20
13. 自分がわかっているのに家の人に同じことを何回も言われた。	.65	.03	-.02	-.02	.08
37. 家の人に何か細かいことを言われた。	.64	.18	-.09	-.03	.13
11. 家の人学校・友人のことなどをしつこく聞いてきた。	.62	-.04	.00	-.03	.10
3. 家の人干渉が激しかった。	.60	-.01	.07	-.06	.10
6. 家の人にちょっとしたことで文句を言われた。	.59	.25	-.08	-.08	.09
23. 手伝いをしているのに家の人に文句を言われた。	.56	.19	-.13	.13	-.06
31. 家の人に約束をやぶられた。	.51	.10	-.05	.18	-.06
1. 家の人に無理やり手伝いをさせられた。	.48	.01	.09	.06	-.05
42. 家の人勝手な思い込みで詮索された。	.47	.24	-.05	.03	.06
14. 家の人に部活のことで言われた。	.40	-.09	.19	-.02	.03
<b>II. 家族間の争い (<math>\alpha = .86</math>)</b>					
25. 家の人同士で言い争いがあった。	-.15	.79	.07	.03	-.02
35. 家の人同士で関係がうまくいっていない。	.00	.77	.00	-.05	-.07
45. 家族の誰かが怒っていた。	.00	.67	.16	.00	-.10
38. 家の人とけんかをした。	.20	.63	.05	-.05	-.04
43. 家の人と言い争いになった。	.24	.59	-.04	.02	.05
40. 家の人人が悪口を言っているのを聞いた。	.02	.57	.07	-.05	.03
28. 家の人から八つ当たりされた。	.26	.50	-.13	.06	-.10
<b>III. 家で時間の使い方 (<math>\alpha = .81</math>)</b>					
20. 時間が足りなくてやりたい事が全部できなかった。	.25	-.10	.69	.04	-.18
29. テストが近いのに勉強していない。	-.07	.07	.66	-.04	.02
34. 家庭学習が計画通り進まなかった。	-.04	.14	.64	-.06	.07
24. 家でテスト前の勉強をしなければならない。	.01	-.10	.57	-.05	.21
5. 自分の計画通りにできなかった。	.14	.08	.53	.01	-.11
19. 学校の宿題が終わらなかった。	-.05	.05	.49	.07	.17
44. 起きなければいけない時間に起きられず寝坊した。	-.03	.16	.45	.09	.03
<b>IV. きょうだいとの関係 (<math>\alpha = .80</math>)</b>					
17. きょうだいにばかにされた。	-.14	.11	.05	.75	.02
2. きょうだいにちょっかいをだされた。	-.09	-.04	-.02	.71	.08
41. きょうだいとけんかをした。	-.14	.12	.08	.68	.08
7. きょうだいに家の手伝いなどをおしつけられた。	.23	-.10	.00	.63	-.03
12. きょうだいに自分のものをかってに使われたり、こわされたりした。	.24	-.13	-.09	.55	-.02
<b>V. 学業に関する叱責 (<math>\alpha = .80</math>)</b>					
9. 家の人にテストの結果でしかられた。	.03	-.14	.02	.08	.84
32. 成績が悪くて家の人にしかられた。	.03	-.04	.07	.05	.80
22. 家の人に「勉強しろ」とかうるさく言われた。	.25	.05	.05	-.10	.53
	I	II	III	IV	V
I	-				
II	.66	-			
III	.39	.42	-		
IV	.29	.39	.39	-	
V	.53	.45	.35	.19	-



Table 2 家庭ストレスとストレス反応の相関関係

下位尺度	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	身体的反応	無気力
I 家族からの干渉	.36 **	.41 **	.37 **	.44 **
II 家族間の争い	.32 **	.34 **	.28 **	.34 **
III 家での時間の使い方	.27 **	.30 **	.23 **	.35 **
IV きょうだいとの関係	.20 **	.17 **	.23 **	.21 **
V 学業に関する叱責	.17 **	.17 **	.16 **	.26 **

1) \*\* $p < .01$

Table 3 家庭ストレス尺度の下位尺度得点の平均、標準偏差と分散分析結果

下位尺度	1年		2年		3年		学年	性	交互作用	Tukey 検定
	(上段: 男子, 下段: 女子)									
I 家族からの干渉	1.95 (1.91)	1.53 (1.55)	1.32 (1.64)	3.88 *	0.02	0.47	.01	.00	.00	1年 > 3年
	1.76 (1.84)	1.70 (1.53)	1.25 (1.55)							
II 家族間の争い	1.28 (1.57)	1.16 (1.56)	1.20 (1.95)	1.76	3.00	2.13	.01	.01	.01	
	1.53 (1.53)	1.86 (1.91)	1.08 (1.26)							
III 家での時間の使い方	1.89 (1.68)	1.72 (1.59)	1.42 (1.57)	4.64 **	0.49	0.50	.02	.00	.00	1年, 2年 > 3年
	1.75 (1.53)	1.82 (1.65)	1.15 (1.18)							
IV きょうだいとの関係	0.79 (1.47)	0.92 (1.37)	0.66 (1.22)	1.49	0.02	0.91	.01	.00	.00	
	1.02 (1.19)	0.78 (1.20)	0.62 (1.03)							
V 学業に関する叱責	1.62 (1.91)	1.31 (1.88)	0.81 (1.51)	11.07 **	2.22	0.46	.03	.00	.00	1年, 2年 > 3年
	1.49 (2.10)	1.19 (1.96)	0.31 (0.85)							

1) 各セルの値は平均値を示す。( ) 内は標準偏差

2) \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

=11.07,  $p < .01$ ,  $\eta^2 = .03$ ) であった。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「家族からの干渉」で1年が3年より有意に高く、「家での時間の使い方」「学業に関する叱責」で1, 2年が3年より有意に高かった。また、性の主効果、交互作用は有意ではなかった。

#### 4. 家庭ストレス尺度と主観的学校ストレス尺度のストレス反応への影響

高校生は家庭ストレスと主観的学校ストレスのどちらを強くストレスとして認知しているのか調べるために、家庭ストレス尺度と主観的学校ストレス尺度を独立変数、ストレス反応の各下位尺度を従属変数とするステップワイズによる重回帰分析を行った (Table 4)。家庭ストレス、主観的学校ストレスともすべての項目の合計点を尺度得点とした。その結果、ストレス反応のすべての下位尺度で家庭ストレス尺度より主観的学校ストレス尺度の方が影響が大きいことが明らかとなった。

#### 5. 短縮版の作成

簡便な測定尺度を作成するために、探索的因子分析結果をもとに、因子負荷量の大きさ、Cronbach の  $\alpha$  係数の値及び項目内容を考慮に入れて、下位尺度3項目ずつ合計15項目を選択した。そして、この15項目について探索的因子分析の因子構造をもとに、AMOS 5 を使用して確証的因子分析を行った (Fig. 1)。その結果、GFI=.95, AGFI=.93, RMSEA=.06, CFI=.96であり、十分な適合度を示すものであった。また、構成概念か

ら観測変数への影響指数は、.63~.88であり、適切に対応がされている様子が見られた。さらに信頼性を調べるため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha = .70 \sim .84$  という値が得られ高い信頼性が示された。また、基準関連妥当性について確認するため、ストレス反応との間で Pearson の相関係数を算出したところ、すべての組み合わせで有意な正の相関がみられた ( $r = .13 \sim .44$ )。したがって、本尺度は一定の基準関連妥当性を備えていると判断できる。

### 考察

#### 1. 因子構造

本研究で作成された尺度の因子構造について考察を加える。因子分析の結果、「家族からの干渉」「家族間の争い」「家での時間の使い方」「きょうだいとの関係」及び「学業に関する叱責」の5因子が抽出された。「家族からの干渉」については、小学生を対象とした藤井 (1996) の「家族からの強制」との関連が予想される。強制されることは一種の干渉でありうる。また、中学生を対象とした岡安 (1999) の「家の人との関係」には、「家の人に決まりを守るように言われた」という項目など干渉に関わる項目も含まれており関連が深いことが予測された。「家族からの干渉」は児童・生徒に共通する因子であると考えられる。「家族間の争い」については、岡安 (1999) においては、関連する因子は見られなかったが、藤井

Table 4 家庭ストレスと主観的学校ストレスのストレス反応への影響

	抑うつ・不安	不機嫌・怒り	身体的反応	無気力
家庭ストレス	.12 **	.18 **	.19 **	.24 **
主観的学校ストレス	.43 **	.38 **	.30 **	.36 **
重決定係数 ( $R^2$ )	.26 **	.25 **	.19 **	.29 **

1) \*\* $p < .01$

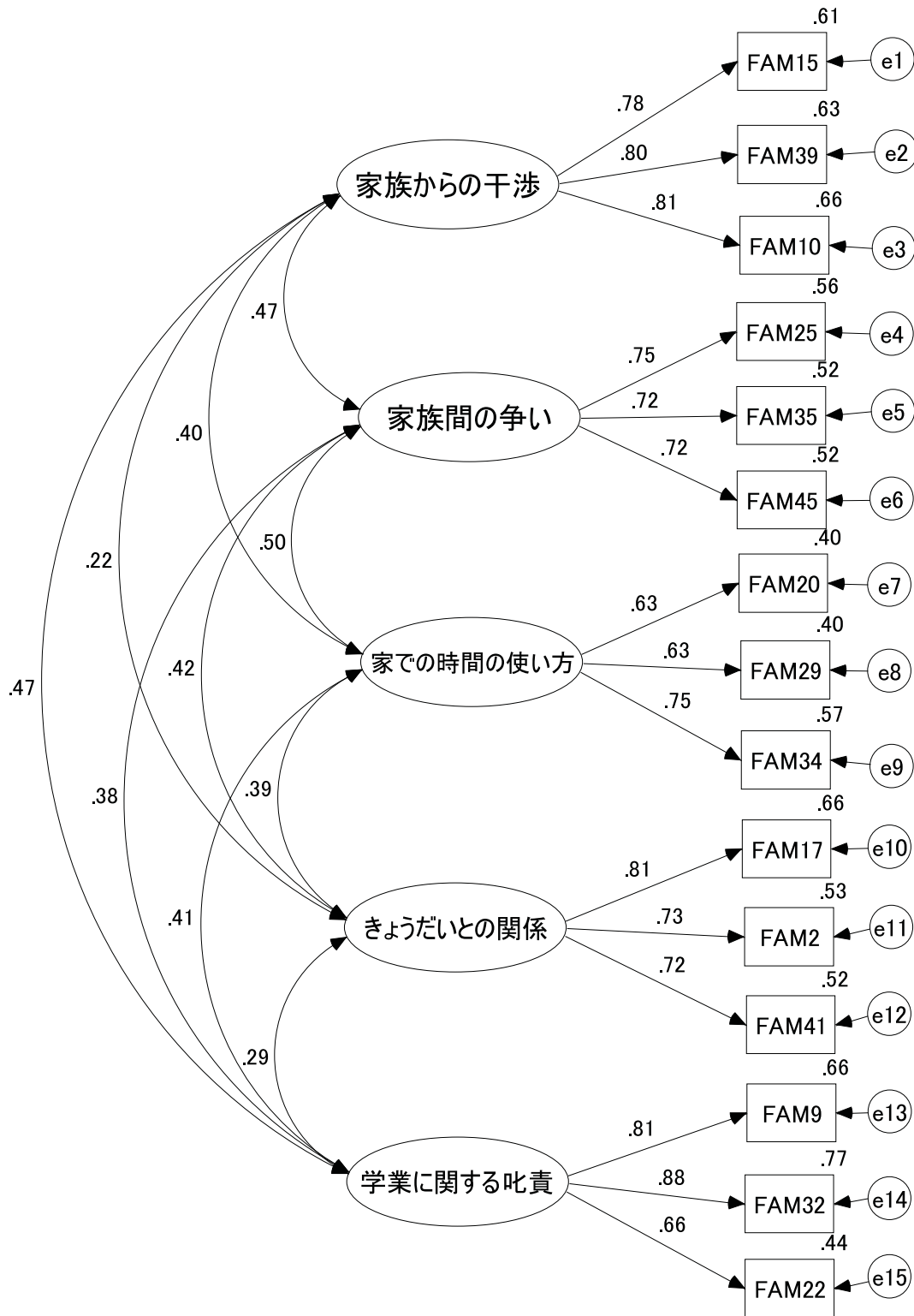


Fig.1 高校生用家庭ストレス尺度の確証的因子分析結果

1) GFI=.95, AGFI=.93, RMSEA=.06, CFI=.96

2) 項目番号は Table 1 の項目番号に対応している

(1996)では、「家族不和」の因子が存在していた。家族が争っていたり、仲が悪かったりしている状況は高校生にとって高いストレスを感じる要因であると言える。「家ででの時間の使い方」については、家庭ストレスに関する先行研究ではストレス要因としては存在していなかった。しかしながら、学校ストレス尺度においては、吉原・藤生(2001)において、時間に関するストレス因子を抽出しており、学校と家庭の場面が違ったとしても時間に関するストレスは存在すると考えられる。また、どちらも高校生を対象としていることから、高校生の発達段階では時間に対するストレスを感じやすい段階かもしれない。「きょうだいとの関係」については、岡安(1999)と同様の因子となった。しかしながら、きょうだいのいない生徒も一定程度おり、一般的な尺度としては疑問が残る。本研究では、きょうだいの有無について区別せずに調査したため、今後、きょうだいの有無によって家庭ストレス尺度の開発を行うことも考えなければいけないと思われる。「学業に関する叱責」については、岡安(1999)においては「叱責」の因子が存在しており同種の因子となった。ただし、本尺度では、学業に関する叱責が中心となっており、より限定された因子になったと考えることができる。

## 2. 信頼性・妥当性

本尺度の信頼性については、 $\alpha$ 係数を算出した。その結果、 $\alpha = .80 \sim .93$ と十分な内的整合性が示され、本尺度の高い信頼性が確認された。次に妥当性については、家庭ストレスとストレス反応との相関分析によって検討を行った。その結果、すべての組み合わせにおいて、家庭ストレスが高いほどストレス反応の表出が高いという結果が得られた( $r = .16 \sim .44$ )。これは、「ストレス反応を引き起こす刺激」というストレスの概念や家庭ストレスに限らず、学校ストレスにおける数多くの研究の結果(藤井, 1996; 岡安, 1999; 吉原・藤生, 2005など)と一致している。

また、前述したように、本尺度では先行研究において確認されている因子と類似の因子が確認されている。以上の点を踏まえると、本研究で作成された家庭ストレス尺度は高い妥当性を備えていると判断できる。

## 3. 学年差・性差

家庭ストレスにおける学年差・性差を検討したところ、「家族からの干渉」「家ででの時間の使い方」「学業に関する叱責」において学年差が見られた。全

体的に1, 2年生の方が3年生よりストレス認知が高い傾向であった。学校ストレスにおいては、岡安ら(1992)のように、学年が上がるにつれてストレスが高くなることを指摘しているが、家庭ストレスにおいては異なる結果となった。3年生の発達段階になると、大人としての対応ができてきて、家族からの干渉に対する対処の仕方や家ででの時間の使い方へのストレス認知が下がってくることも考えられる。残念ながら今までの研究からは十分な知見が得られていないことから、今後も検討していくことで知見を得ていくことが課題として挙げられる。

また、性差については本研究では有意差が見られなかった。学校ストレスにおいては三浦・川岡(2008)などで男子より女子の方がストレスが高いことを報告している一方で、家庭におけるストレスについて性差は見られなかった。学校環境では友人関係などで女子は男子に比べて気を使う場面が多く家庭環境との違いが影響していることも考えられる。今後さらに検討を重ね知見を積み上げていく必要がある。

## 4. 家庭ストレス尺度と主観的学校ストレス尺度のストレス反応への影響

ストレス反応のすべての下位尺度で家庭ストレス尺度より主観的学校ストレス尺度の方が影響が大きいことが明らかとなった。藤井(1996)では、学校ストレスの方が家庭ストレスに比べ、ストレス反応への影響が大きいことを明らかにしているが、本研究においても、学校ストレスの方が高校生に与える影響が大きいと言える。日常生活における環境からのストレスは、少人数で身内の中で起こる出来事が多い家庭環境に比べて、様々な人と関わる中で様々な出来事が起こる学校環境の方がはるかに高いことが想定されることから妥当な結果であろう。ただし、嶋田(1998b)が述べているように、「両親が離婚した」「親から虐待を受けた」など、生活上の大きな出来事(ライフイベント)を経験した場合は非常に重篤なストレス状態に陥ることが考えられ、家庭ストレスの影響には十分に配慮する必要がある。

## 5. 短縮版の作成と今後の課題

簡易な測定尺度を作成するため、家庭ストレス尺度の短縮版の作成をしたところ、十分な信頼性と妥当性を備えた尺度を作成することができた。15項目の尺度ということで、調査協力者への負担が少なく、様々な場面で活用されることが期待される。今後は、本尺度とストレス反応尺度、コーピング尺度、ソー

シャルサポート尺度などを組み合わせたモデルの検討を行うことで、家庭ストレスに関する知見を得ることができると考えられる。

また、本研究では中堅の高等学校を対象とした調査研究となったが、高等学校は学校により特色があるため、今後様々な学校についても調査研究を行い、高校生全般に適用できるようにしていくことも今後の課題の一つと言える。

#### 引用文献

- 藤井克也 (1996). 児童を対象としたストレスによるストレス反応予測の試み 日本健康心理学会第9回大会発表論文集, 80-81.
- 池上知子・井上敦史 (2001). 中学生におけるストレスと攻撃性の関係 - 攻撃衝動・攻撃感情に注目して - 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 248.
- 石原金由・三宅 進 (1993). 児童における家庭ストレス尺度化の試み 日本心理学会第57回大会発表論文集, 405.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. Springer: New York. (本明寛・春木豊・織田正美 (監) (1991). ストレスの心理学 [認知的評価と対処の研究] 実務教育出版)
- 三浦正江・川岡 史 (2008). 高校生用学校ストレス尺度 (SSS) の作成 カウンセリング研究, 41, 73-83.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 (1992). 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, 63, 310-318.
- 岡安孝弘 (1999). 中学生の家庭関連ストレスに関する研究 日本健康心理学会第12回発表論文集, 220-221.
- 坂 晴己子・真中陽子 (2002). 高校生の学校ストレスとソーシャル・サポートおよびコーピングとの関連 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, 7, 9-18.
- 嶋田洋徳 (1998a). 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房
- 嶋田洋徳 (1998b). 子どもが受ける学校ストレス・家庭ストレス (子どものストレス親・教師のストレス - 上手な解消法とつきあい方) 児童心理, 52 (18), 14-22.
- 田中宏二・谷本弘樹 (2002). 児童・生徒の心理的ストレスに関する研究動向 - 学校ストレスと家庭ストレスの関連 - 岡山大学教育学部研究集録, 119, 141-146.
- 吉原 寛・藤生英行 (2001). 主観的内容に焦点を当てた学校ストレス尺度の作成 上越教育大学心理教育相談研究, 1, 37-47.
- 吉原 寛・藤生英行 (2005). 友人関係のあり方と学校ストレス, ストレス反応との関係 カウンセリング研究, 38, 128-140.

(2019. 1. 11 受理)